



学内学会会報 第33号

～今春ご退官された武川正吾先生よりご寄稿いただきました～
定年にあたって徒然なるままに

武川 正吾 (元社会福祉学科教員)



2024年3月に明治学院を定年退職した。定年退職という言葉から想像されるのは「明治学院を去るにあたって」といった類いの文章の寄稿であろう。しかし引き続き非常勤講師として授業を担当することになるので、少なくとも一年間は明治学院でお世話になる。科研費の事務も続けてもらうこととなった。

私は2019年4月に赴任したので、専任教員として仕事をし

たのはわずか5年に過ぎないのだが、この原稿を書くに当たって記憶をたどっていくと、最初に明治学院の名前を知ったのはなんと小学校入学前のことであった。当時、北多摩郡東村山町の団地に住んでいた私は、明治学院という高校（記憶では中学だったが、いま調べてみたら当時は高校のみだった）が近くにあるというのを知り、田園風景のなかから遠目で生徒たちが部活をしているのを眺めたことがあった。市制が布かれる前の東村山は茶畑や麦畑が広がっていて、のどかだった。茶畑からは狭山茶が市場に出荷されていたはずだ。

その後、とくに学院との縁が深まることはなかった。明治学院高校に進学した中学同級生が一人いた。明治学院大学に転職した元職場の元同僚も一人いた。明治学院大学院を出て研究者となった一人と共編著（『社会政策と社会行政』）を出版したこともある。元学長の松原さんとも私が最初の職場に就職してすぐのころ、偶然、席を同じくしたことがあったのだが、おそらくご本人はお忘れだろう。それくらい縁だった。

共編著者となった一人とは大山博さんのことである。大山さんは後に学内行政の手腕を発揮して法政大学に現代福祉学部を創設することになるのだが、彼の最終学歴（単位取得退学）が明治学院大学院の博士課程（後期）だった。彼は中央大学で江口英一先生の薫陶を受けて、社会福祉の研究を志すも、当時は、社会福祉

で博士課程のある大学院は、明治学院に限られていたのである（と思う）。大山さんとは気があったので、研究会や酒席を多く共にした。そうしたこともあって大山さんと知り合ってから、私の頭の隅にはつねに明治学院の名前があった。

私事になるが、一時期、子供が泉岳寺に住んでいたため、車で国道一号線を横切ることがいくどかあった。ただ正門前を通り過ぎるだけでキャンパスの中に入ることはなかった。

白金のキャンパスの中に入った最初は、1980年代後半だったと思う。社会学部の大橋薫先生の科研費（「戦後の東京における都市問題の推移」）に入れてもらい、最初の研究会が明治学院大学で開催されたからである。インブリー館だったか記念館だったかの開催だったと思うのだが、正確には思い出せない。おしゃれな雰囲気会議室で大人数が集まって開催されたことだけは覚えている。大橋先生の共同研究のやり方は、研究者を大勢集めて研究費を配り、その後は各自まったく自由に研究させ、締切までに各自が報告書を提出するというものだった。したがって全員が集まる研究会は最初の1回だけで、インブリー館だったか記念館だったかに入ったのも残念ながら1回限りだった。私は東京都の被保護世帯の分析をした報告を提出して、大橋先生の科研費から去った。1991年3月のことである。

二回目にキャンパスの中に入ったのが何時だったかは覚えていない。研究会で数回は訪れた気もするが、確信がもてない。主観的には空白期間である。明確に覚えているのは、和気康太さんからのお誘いで、明治学院創立150周年シンポジウムに登壇したときである。2013年7月19日であった。社会学部主催の「激動の世界における日本の転換点」という企画のなかで、第1回が白波瀬佐和子さん、第2回が阿部彩さん、第3回が近藤克則さんと続いて、第4回目に話をした。演題はいまから考えると大言壮語で気恥ずかしいのだが、「21世紀型福祉社会への途」というものだった。若気の至りだったかもしれない。

その次にキャンパスの中に入ったのは、忘れもしない2018年秋の模擬講義と採用面接のときだった。ヘボン館の教員談話室に呼ばれ、当時の学科主任の案内で会場に向かった。どこをどう歩

いたのか、そのときは狐につままれたような気分だった。「明学迷路」という言葉があることを後にゼミの学生から聞くことになるのだが、まさに迷路に迷い込んだかのごとくの印象だった。専任教員になってからも「明学迷路」のなかで教室や会議室をよく間違えた。恥ずかしい限りである。

2019年に着任してからは足繁く通い、キャンパスの構造を頭の中に定着させるはずだったのだが、あしかけ4年も新型コロナ禍に襲われ、それも適わなかった。

私の最初の就職は社会保障研究所員だったが、2番目以降は中央大学、東京大学、明治学院大学で、三つの大学で教員生活を送ったことになる。そのため、ひとからそれぞれの大学の学生気質の違いについて聞かれることがよくある。それに答えるのは難しい。それぞれの大学に勤めていたときの時代背景も異なるうえに、教員生活が40年近くにも及ぶからである。学生の方は20歳前後で固定だが、教員の方は毎年確実に一歳ずつ年をとる。最初の大学では年の離れたお兄さんとして過ごしていたが、次の大学では、ある日、突然学生から「私のお母さんと同じ年齢」と宣告され、はたと我に返る。いまでは祖父母が私と同じ年齢の大学生がいてもおかしくない。それぞれの大学で、私の方で年齢に応じた役割

が変わっているのに、厳密な比較はできないのである。

また前任校が東京大学だったため「東大の学生と比べて明学の学生はどうか」といった質問もよく受ける。採用面接の時も、面接官から、学生の質が変わるがよいかと念を押された。これらに対する回答はいつも「学生は学生だ」というものであった。これは三つの大学の経験から共通して言えることだが、他の大学まで含めると異なった結論になるのかもしれない。それは、個性的な学生もいるが、総じて人なつっこい学生が多い、ということである。学生のトラブル対応に時間をとられることが全くなかったわけではないが、教員生活において学生で苦勞することは少なかつた。運が良かった。

「学生は学生だ」というのは、「学生は学生に過ぎない」という意味合いもある。どういうことかという、いわゆる偏差値の高い学生もそうでない学生も、学びの途中にあると言う意味では五十歩百歩だということである。したがって講義の内容を大学によって変えたこともなかった。

学生は学生なのであるが、教授会は教授会ではなかった。このことも書いておこうと思ったが、徒然なるままに書いてきたら、規程字数を超えてしまった。したがってここで筆を擱く。

総会後の特別講演会

石原英樹先生「性的マイノリティをめぐる寛容性と不可視性」に寄せて

社会学・社会福祉学会 学生部会 STEP 和泉昌希（社会学科2年）

2023年6月24日に第33回社会学部学内学会総会が行われた。総会後の特別講演会では、本学社会学部社会学科教授である石原英樹先生と石原ゼミの学生である2名との対談形式で講演会が行われた。「性的マイノリティをめぐる寛容性と不可視性」というテーマの下、前半は、石原先生が過去に出した論文と共に性的マイノリティに対する周りの寛容性がどのように変化していったのかを解説され、後半は、サバティカル期間において石原先生がどのような研究をしたかを紹介するという構成で進められた。

2009年、石原先生がアメリカのウィスコンシン州立大学で研究中に、当時のオバマ政権下で同性婚に関する大きな動きを知った。その際、アメリカ社会で家族の認識はどのように変化するかということに興味を持ち、アメリカ人研究者の社会学論文を調べた。アメリカの論文では、家族というカテゴリーの中にゲイやレズビアンといったセクシャルマイノリティのカップルの子どもも平然と含まれており、石原先生は日本の論文との違いに大きく衝撃を受けた。このことをきっかけに、日本のセクシャルマイノリティについて興味を持ち、調査を開始した。

現在、全国各地で開催されているレインボーパレードも1994年に初めて開催され、LGBTQ+の認知が始まった。2000年には、同性愛を嫌悪していた人がゲイの「ハッテン場」である新木場で

ゲイを殺害してしまった「新木場殺人事件」が新聞に掲載されたことによって、広範囲に認知されるようになる。また、2011年に起きた東日本大震災によって、心と身体の性が異なるトランスジェンダーが、避難所のトイレを使用する時に困るといったことも可視化された。また、翌年には政府統計によって、性的マイノリティは、異性愛者に比べ、自殺率が高いことも判明した。石原先生は、当時の日本では少なかったLGBTQ+の統計的分析を行い、日本における同性愛の寛容性を調査した。アメリカとの比較をした結果、性差や土地柄、学歴による寛容性の変化はアメリカと同じだったものの、日本はアメリカとは異なる特徴があることも判明した。同調査では、世界価値観調査を用いており、日本社会において同性愛の寛容性が上がっている事も判明している。

2013年には、性的マイノリティに対応する制度が各地で誕生し、日本社会全体がポジティブな方へ進んでいることが分かっている。石原先生は、同年に高校生の性の形成は同性愛の寛容度にもどのような変化をもたらしているかを調査した。驚くことに、保健体育などの教育を通して最初に性を学んだ人は、インターネットやコミックスで学んだ人よりも寛容度が低いという結果がでた。また、男性の先輩から教わった際にも、寛容度が低いことも判明した。この結果に対し、石原先生は、男性の先輩から性を教

わった時にのみ寛容度が下がっているのは、同性愛嫌悪などのその人の価値観が含まれているからではないかと推測している。

2015年には、東京都渋谷区でパートナーシップ制度が開始され、条例レベルではあるものの死亡時や住居の登録などの制度がつけられた。また、文部科学省がトランスジェンダーという存在を認知し、女子でもスラックスの着用を選択できるといった制服の選択性の導入の足掛かりとなった。この話に関連して、ゼミ生はスラックスを選択できる高校にいる弟の話をしてくれた。その高校では、スラックスを履いている女子に対し、トランスジェンダーではないのかという偏見は見受けられず、楽だから履いているという感覚が広がっていることが分かった。

同年に、石原先生は、「時論公論」といった番組に出演し、同性愛への寛容性について、自身の研究を基に話された。この際に、石原先生は当事者でないにも関わらず、同性愛について語るのをおかしいと当事者たちから言われるのではないかと不安に思っていた。しかし、当事者からは、そのような否定的な反応が出なかったことに驚いたと述べていた。また、寛容性という言葉は良くない。代わりに、フランスの哲学者であるジャック・デリダが使用した「歓待性」という言葉を使うべきではないかと述べていた。

2016年以降、日本では急速に性的マイノリティへの制度や理解が進み、高校の保健の教科書にLGBTの記載がされたことや心の性に身体を合わせる性別適合手術が保険の適用範囲内になった。2018年、本学における性的マイノリティ相談窓口の設置が予定され、石原先生は総合支援室長補佐として活躍されてきた。性的マイノリティ当事者の意見を踏まえ、名称を変更するなどの多様な意見を基により良い相談機関の設置に力を尽くした。

研究休暇であるサバティカル期間には、本学におけるSOGIE(性的指向・性自認・性表現)の多様性を尊重するキャンパスに向けた方針を定めることやゲイのマッチングアプリとして有名である“9monsters”(通称:ナイモン)などの調査を行った。

講演会後に行われた質疑応答は、参加した学生や先生によって、様々な視点からの質問がなされ、講演会の内容をより深く掘り下げることができた。具体的には、BL(ボーイズラブ)が性的マイノリティへの寛容性に影響を与えていないのではないかとといった身近な質問や現在も問題視されているスポーツ大会でトランスジェンダーをどちらの性別に組み分けるか、スラックスの制服の選択制は、環境や世代によっては差別されるのではないかとといった質問が展開された。

個人的には、性的マイノリティに対し、寛容であるか、それとも歓待するかという話はとても考えさせられた。性的マイノリティ当事者でもそれぞれ、社会にはどのようにあって欲しいかの姿が変わるのではないと思う。今回の講演を通じて、性的マイノリティに対する寛容性を学べたことでこのような発見をすることができた。

2023年度 学内学会活動報告

★会報第32号発行

6月1日(木) 発行部数 2,500部

★第33回総会・特別講演会

6月24日(土) 白金校舎3号館1階3202教室、Zoom会議室
対面33名(教職員6名、学生23名、卒業生4名)、オンライン10名(教員2名、学生8名)の合計43名が参加。

2022年度決算報告、2023年度予算案が承認された。また規約の改定が提案され、金融機関から記載追加を求められていた所在地(住所)、設立年月日の記載を追加することを承認された。

総会後は、社会学科教員である石原英樹教授による特別講演『性的マイノリティをめぐる寛容性と不可視性』が行われた。(講演の内容は、Socially+2024に掲載)

★研究発表会

12月16日(土) オンライン(Zoom)で開催した。

3分科会で合計22件の発表が行われた。内訳は、ゼミ発表7件(社会学科4件、社会福祉学科3件)、調査実習Gr発表2件(社会学科2件)、個人発表13件(社会学科4件、社会福祉学科1件、大学院社会学科専攻4件、大学院社会福祉学専攻4件)であった。個人発表の13件のうち8件は大学院生による発表であった。今年度もオンライン開催となったが、分野を越えて各々の問題関心を伝え合う貴重な時間となった。

また、3つの会場の司会進行は学生会メンバーが担当した。

自己呈示を表す得点

- 関係流動性の得点
- 集団内で望まれている12項目の性格特性のふたつで相関分析を行った
→有意な負の相関がみられた4項目 = 低関係流動的(閉鎖的集団で望まれる特性)
- 上記4項目について集団内での性格特性-普段の性格特性の計算し、平均値を求めた



●第一分科会

滝吉 菜穂子(22SWM)

精神科長期入院者への退院支援
ー地域支援者との連携・協働に着目してー

邱 書中(23SWM)

中国の都市部における高齢者事業の現状と課題
ーA有料老人ホームの現地調査を中心に

加納 明美(23SWM)

生活保護更生施設の現代的課題

明石 和宏(23SWM)

高齢者虐待における養護者支援に関する研究動向

FANG JIZHOU(20SW)

人工妊娠中絶の権利に対する擁護のあり方 ～フェミニスト・
ソーシャルワークという文脈における試論～

藤井 佳子 ゼミ(3名)

多世代交流の意義と課題 その1

金 圓景 ゼミ(3名)

多世代交流の意義と課題、その2

明石 留美子 ゼミ(2名)

外国にルーツを持つ子どもの居場所とは

●第二分科会

菅生 民子(23SGM)

女性の昇進問題についてー研究計画書を通してー

李 沁怡(23SGM)

中国における月経観の変容

平野 夕海(23SGM)

ロボットと人間の共生社会
ーガストの猫型配膳ロボットの事例研究ー

ソウシイ(20SG)

現代中国社会における婚資の実践

安田 尊哉(20SG)

「本当の自分」を見つけることは可能か

富永 匠一(20SG)

ヒッピーコミュニティ「部族」について

梶原 湧(20SG)

地方に急増する留学生

●第三分科会

ZHANG TONG(23SGM)

男性育児支援におけるネットワーク形成と男性性に対する影響
ー都内の育児する父親を対象にー

石原 英樹 ゼミ(2名)

現代日本の文化研究 K-pop・アプリにみるジェンダーを
中心に

仲 修平 実習クラス(7名)

雇われない働き方に関する質的調査

ーフィールドワークとインタビューによる調査報告ー

鬼頭 美江 ゼミ(7名)

鬼頭ゼミ①友人関係や恋人関係の形成に関する検討

鬼頭 美江 ゼミ(7名)

鬼頭ゼミ②オンラインでの印象形成や関係形成に関する検討

鬼頭 美江 実習クラス(9名)

マッチングアプリの利用実態に関する調査

坂口 緑 ゼミ(5名)

健康まちづくり

～港区芝地区の健康遊具に関する調査～

★Socially+ 2024発行

3月1日 発行 部数 2,500部

昨年度より、社会学部生の今を知る冊子として発行を開始。

企画・デザイン・編集も学生会STEPが一から担当した。



学生会STEP活動報告

【通年企画】

☆X (旧 Twitter)・Instagram 運営・質問対応

学生の履修やキャンパスライフの疑問や不安を解決する窓口として運用。この取り組みをきっかけとして入会する人も多くいた。

☆HP 運用

学生会のコンテンツのポータルとして始動。社会学部生が困ったときに訪れる場所として整備、運用している。

☆アカデミックラジオ (STEP 自由研究)

授業で聞き逃してしまいがちで大切なこと、社会学を面白いと感じてもらうことを目標に内外に発信するラジオ・Web企画。今年度は白金祭の企画として特別版を配信。

☆明学散歩

学内や学外の学生向けスポットを動画や Instagram の投稿にして紹介する企画。



【年間活動】

★新入生学科ガイダンスでの広報

(担当：佐藤一貴・佐藤博久・山本朱夏・上野文華・保坂新・前田有輝)



4月3日(月) 新入生学科ガイダンスは、2教室で行われた。Socially + 2023 を配布するとともに新入生の誘導を行い、広報の時間では、学内学会の活動の紹介・勧誘のための説明を行った。

★履修登録相談会：X(旧 Twitter) スペース

(担当 山本朱夏・松村知香・兼原宙愛・並木彩華・前田有輝・三村悠・高木亜利沙・保坂新・渡邊葵衣)

Instagram ライブ(担当 佐藤一貴)

4月3日(月) X では75名程度の同時接続。累計100名程度接続された。Instagram では54名程度の同時接続、累計208名程度接続された。履修登録に不安を抱える新入生達を、中立的かつ専門的な立場からサポートした。

★山中湖合宿

9月4～6日(月～水)にSTEP11名で山中湖にて合宿を行った。今後の企画に向けての活動を通して、学年を超えてSTEP内の懇親を深める良い機会となった。

★社会学科ゼミサロン(担当 山本朱夏・河南恭子・向山凌・二見綺音・内野優実・並木彩華・原愛菜)

9月16日(土)・17日(日)ゼミ選びを直前に控えた2年生を

対象に、教員を介さずに直接ゼミ生の声を聞けるイベントをオンライン開催。生配信では夏休みにも関わらず昨年よりも多くの人数の参加があった。その後、9月30日(土)には16・17日の後日配信を行った。両日共に、盛況であったが、広報の期間も短かった為、来年度はさらに広報活動に力を入れたい。

★卒業生部会・学生会共催の講演会(ヤングケアラー協会 小田桐麻未氏)

10月28日(土)ヤングケアラー協会より、小田桐麻未氏をお招きし、「ヤングケアラーとは？－日本の概況と体験談か考えるこれからについて－」というテーマのもと、ご自身の体験談やヤングケアラーを取り巻く環境などのお話しをしていただいた。白金校舎での対面とYouTube ライブ配信で行い、学生会18名、卒業生部会1名、外部参加者8名の27名が対面での参加、オンラインでは30名の視聴数となり反響があった。

★白金祭

11月1～3日(水～金)に行われた白金祭にSTEPが初参加した。教室で縁日と称し、ヨーヨー釣りや輪投げ、型抜き体験を企画、ラジオ形式の配信番組の収録も同時に行った。累計で400名以上の方が訪れ、学内学会を広く知っていただくことができた。来年度も出店予定で、学内外に向けて更に学内学会の活動をアピールしていきたい。

異動・消息

- 2024年1月 春日清孝非常勤講師 ご逝去。
2024年3月 社会福祉学科の武川正吾先生が退任。
2024年3月 社会福祉学科の米澤旦先生が退任。

学内学会 新体制

会長	新保 美香 (社会学部長・社会福祉学科教授)
副会長(主任)	深谷 美枝(社会福祉学科教授)
副会長	加藤 秀一 (研究所所長・社会学科教授)
編集担当	柘植 あづみ(社会学科教授)
企画担当	佐藤 正晴(社会学科教授)
会計担当	和気 康太(社会福祉学科教授)
卒業生部会委員長	堀込 伸一(1992年卒業)
学生会委員長	山本 朱夏(社会学科3年)

2024年度 学内学会活動予定

- 4月1日(月) 【学生会 STEP】新入生学科ガイダンスで
広報(白金校舎)
- 4月3日(水) 【学生会 STEP】履修相談会(白金校舎)
- 5月12日(日) 【学生会 STEP】1年生アカリテ対抗
ドッチビー大会
- 6月1日(土) 会報33号発行2,400部
- 6月上旬 第1回合同役員会議 (Zoom)
- 6月22日(土) 第34回総会・
特別講演会(ハイブリッド開催)
- 8月中旬 【学生会 STEP】合宿
- 9月下旬 【学生会 STEP】社会学科ゼミサロン
- 10月下旬 【学生会 STEP/卒業生部会】講演会
- 11月1～4日(金～月)【学生会 STEP】白金祭
- 11月中旬 【卒業生部会】社会福祉学科卒業生と在校生
の交流会
- 11月下旬 【学生会 STEP】社会福祉学科ゼミサロン
- 12月14日(土) 研究発表会(開催方法未定)
- 2月中旬 第2回合同役員会議

第34回総会・講演会のお知らせ

今年度も昨年に引き続き遠方でも参加しやすい利便性から、対面とオンライン同時のハイブリッド開催で行います。

沢山のご参加をお待ちしております。

日時：6月22日(土) 14:00～

*受付開始時間 13:30～

Zoom 会議室入室可能時間 13:45～

会場：明治学院大学 白金校舎 3号館 1階 3203教室

Zoom 会議室

1. 総会 14:00～14:45

2. 特別講演会 15:00～16:30

講演者：三輪清子教授(社会福祉学科)

講演テーマ 『子どもと里親～地域社会における緩やかなネットワークの形成を目指して～』

*講演会のみのご参加も可能です。

社会学・社会福祉学会運営費のご協力をお願い

本会の運営費は学生と卒業生の皆様の会費によってまかなわれています。

会費は年2,000円です。充実した活動を行う為にぜひご協力をお願いいたします。

また、会費を納入いただいた方には、会報や諸事業の開催案内等も送付予定です。

会費振込先：ゆうちょ銀行

店名 〇一九(ゼロイチキュウ)店

預金種目：当座預金

口座番号 0096903

加入者名 明治学院大学社会学・社会福祉学会

振込依頼人名は「在学時のカタカナフルネーム」と「入学年」を記載ください。

例) 2018年入学、2022年卒業

明治学子(在学時旧姓：社会)さんの場合

振込依頼人名：シャカイガクコ 2018

※銀行振込・郵便振込が可能です。郵便振込をご利用の場合は、『払込取扱票』をご使用ください。確実な振込情報確認の為、銀行振込後は以下のQRコードより振込日をお知らせください。

※住所・氏名変更の際は、ハガキ・E-mail又は以下のQRコードよりご連絡ください。



連絡先：〒108-8636 港区白金台1-2-37

明治学院大学社会学部附属研究所内

明治学院大学社会学・社会福祉学会

E-mail shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp